

## ウエーキ島、地獄の孤島に二年半

京都府 谷 口 義 明

私は大正九（一九二〇）年三月生れ、当時は、父親が鳥取県米子で五町歩の桃園を経営していた関係で、富益村（米子市）に在住していました。

昭和十七（一九四二）年十二月、本籍の木津村役場より「海軍三カ月の教育召集」の令状を受けました。それには昭和十八年一月十一日舞鶴駅前集合とあり、当時としては、身体障害者以外は召集が来るのは普通でしたが、海軍より来るとは夢にも思っていませんでした。

入団の前日、故郷の木津に帰り、駅前で多くの人たちに送られて舞鶴駅に集合しますと、駅前には大勢の人が集っており、時間がくると下士官による人名の点呼、短剣を下げた格好よい士官の話があり、私たちは海兵団に行き、身体検査があつて合格、身長に合わせて軍服が支給されました。

二等水兵のでき上りです。

私たちの分隊は二十二歳から三十歳まで、学歴も小学校から大学卒までの兵たちで、海軍始まって以来の老新兵の集りで、教班長より年齢の大きい人は大勢いました。面会に来た子供が、セーラー服の父を見て「お父さん可愛くなった」といわれた人もいました。しかし訓練はそんなことには関係なく、各個訓練、短艇など厳しいものでした。

ある日短艇訓練で私たちの分隊はビリになった。教班長に「第一教班長、食事用意よろしい」と報告したのですが、他教班は食事をしているのに私たちの教班長は食事にこないのです。「ビリになったので飯を食わせないと違うか」とこそそ話していると、教班長がしかめ面でやって来て、「短艇がビリだから夕飯抜きだ」といつて帰ってしまつた。他の教班長はニコニコしながらこちらを見ている。腹はグウグウ、しかし夕食でよかつたと思ひました。

ある日教班長が「君たちは上海に行くが、途中

攻撃があるか分からないから誰にもいうな」といった。そのときひょっとしたら、三カ月では帰れないなあと思いました。一月下旬その日がやって来ました。欧州航路の豪華船舶上の人となり、舞鶴部隊はダンスホールが部屋となりました。

夜になり玄界灘は大時化となり、右にゴロリ、左にゴロリ。翌日はおだやかに、揚子江を上がって一月三十日上陸、上海海軍特別陸戦隊に入って現地教育を受けました。気候は、三寒四温で寒い朝は弱りましたが、訓練は学校の教練の時間に習ったことばかりで、陸軍と同じで苦にはならなかったのですが、対抗ピンタや風呂場からの匍匐前進などもさせられ、四月十五日で新兵教育は終わりました。

ここで教育召集満了になり、充員の召集を命ぜられ、上海に残る者と外地に行く者に分かれられました。私はウェーキ島の第六十五警備隊行きとなりました。そのときは人数も多いし人気もありましたが、これが運命の分かれ目になるうとは夢にも

思いませんでした。

翌日船で出港、横須賀海兵団に仮入団しました。その間何回か、「帽振れ」で戦地に行く戦友たちを見送りましたが、今度は私たちが帽子を振られて輸送船に乗って出港となりました。戦艦「大和」の横を通り太平洋上へ、途中連合艦隊の泊地であるトラック島で停泊。ここでは艦橋の無い軍艦などが入港してきたり、艦上で手を振っているのに向かって「ご苦労さん」と我々も思いきり手を振ったものです。一週間ほどで出港、船は魚雷攻撃を避けるためジグザグ運動をしながら進行してクエゼリン島に入港しました。

この島には現地人がいて、椰子の実などを採ってくれました。一週間ほどで出港、相変わらずジグザグ運動で前進しました。「水平線上に小さな舟が見えるぞ」の声で上甲板へ上りますと、敵か味方か、ものすごい速度で接近してきます。「アッ、軍艦旗」と、戦友とホツとしたものです。この高速魚雷艇はウェーキ島から護衛に来てくれた

ものでした。

島が見えて来ると、浜に艦が二隻乗り上げているのが見え、これは「第三十二、第三十三号哨戒艇」で、上陸作戦で艇と共に突っ込み占領に成功したとのこと。

私たちは六月十三日上陸、配置は水警隊となりましたが、二週間ほどで首岬の二〇センチ砲台へ配置替えとなりました。ウエーキ島はミッドウエー島から約千百カイリ、面積わずか八平方キロの最前線で、白いサンゴの砂浜、低い灌木に覆われ、無数の海鳥が飛びかい、夜は南十字星が輝き、一年中温かい常夏の島です。

(ウエーキ島は従来、無住の島であったが、昭和十年に航空路の中継地となり、昭和十四年から日米戦を予測した米国が、強大な海、空軍基地を建設した。

このウエーキ島の攻略は、日本海軍だけで行った作戦で、開戦当初の第一次攻撃は失敗に帰し、十二月二十二日第二次攻撃を再興して二十三日こ

れを攻略し、その後「大鳥島」と改名した。

第二次攻撃では、マーシャル諸島のルオット島に避退した攻略部隊は陸戦隊を増強し、グアム島攻略作戦を終了した第六戦隊を加えて第二次ウエーキ攻略に向った。これより先、航空部隊は連日昼夜にわたり同島に爆撃を加え、さらにハワイ攻撃の帰途にあった第八戦隊及び第二航空戦隊の協力を得て、残存敵機を掃滅することができた。

攻略部隊は二十二日夜半、ウエーキ島に近接したものの風波強く、上陸舟艇は前回同様夜間の浮水が不可能となり、攻略部隊指揮官は悲壮なる決心の下に、第三十二、第三十三号哨戒艇をウエーキ本島南岸に擱坐せしめ、陸戦隊の直接上陸を行うと共に、両艇の大発動艇二隻をもって、一部の陸戦隊をウイルクス島南岸に上陸させた)

私たちが島に上陸した時は、島には九十八人の民間人捕虜がいて、当時我々が国内では、見たこともないブルトラー、シヨベルカーその他重機の運転をして、戦車壕を掘ったり飛行場の整備を

していました。映画も時々本部であり、これが戦地かと思うほどでしたが、やがて運命の日がやってきたのです。

昭和十八年十月六日午前三時三十分、仮眠所に「配置につけ」のブザーが鳴りました。今日の訓練は早いなあと思いつつ大砲に上がり受話器を耳にしました。

「一番砲！ 一番砲！」と指揮所からです。「一番配置よし！」「目標、敵戦艦……」。首岬一、二番砲は島の主砲です。これに海陸両軍の高射砲、平射砲の発射が始まり孤島が火を噴いた様相を呈しました。

空には敵のグラマン、B 29の三十機、五十機の大編隊、これに向って何発か発射しました。さらに艦砲射撃が激しくなり、隣のM上水がパツタリ倒れました。「Mさん！」と叫んだが返事もなく即死でした。

血がパツと服に着きました。「先任下士！ Mさん戦死」といったが、その声は轟音で聞こえない。

い。戦いは続いている。軍属がチェンブロックで砲丸を上げる。火薬をつめる。皆な必死でした。

グラマン、B 29の攻撃は激しさを増し、発電所をやられたらしい。電動装置が不能になりました。「指揮所！ 指揮所！ 一番旋回不能」。少しして「伝令を置いて、その他は待機！」との命令がありました。私は一人大砲の下に入り、他の者は防空壕に避難しました。敵の上陸は必死と、夜はタコ壺で機銃を以って待機しましたが上陸はしてきませんでした。

翌七日、再び反復攻撃が始まり、すでに敵艦が肉眼で良く見えるまでに接近している。今に友軍機が来ると期待していましたが来ない。日本の飛行機は全部やられたらしい。制空権は完全に敵のものでした。

敵の観測機が上空で弾着地を修正し、思いのままの砲撃をしています。B 29、グラマン（二日で七百四十機）、そして艦隊の交互の艦砲の攻撃で、重要な建物は破壊され、食糧はほとんどなくなり

ました。戦いの最中に捕虜は本部で銃殺された、とのことでした。

その後毎日、定期便の爆撃があり、敵機は電探を避けるため海面すれすれに来るようになりました。さらにロケット砲を飛行機から発射するようになつてから、どんどん陣地が破壊され、指揮所も直撃弾により小隊長以下所員全員が戦死、士官の補充がないまま先任下士官が小隊長になりました。

かくして陸海の軍人、軍属五千人は孤島に釘づけされ、その後は、飢餓との戦いで全島は地獄と化したのです。

島は全島サンゴ礁で、食料になるものは一切ありません。農園があつたのですが、これもハワイから船で土を持って来て作った農園です。三回ほど潜水艦で、ゴムの袋に入った三十キロ入りの米を陸揚げしましたが、五千人の兵員には焼け石に水でした。

一年分保管していた食糧は、被弾で食料になら

ず、当然、減食が行われ、主食が半分ぐらいに減り、そのころから、多い少ないで食卓番の配膳がむずかしくなつたのです。それで飯を入れるとテーブルの上に並べ、一人はどこかに箸を立て、背を向けた一人が箸を立てた所から何番目という、それを先任下士官から順番に配る。時には右回りとか左回りいつて公平を期したものです。

四月ごろから主食は一日二回になり、しかもその量は三分の一に減り、それこそ三口ほどでなくなるほどでした。それで皆は一粒一粒数えるようにして食べている状況でした。このため身体はどんどん痩せていきました。

海に行きリーフの中で魚を捕ろうとしましたが、なかなか捕れない。そのうち誰かが鉄砲ヤスを考えました。飛行機の油送管の中に、ベットのスプリングを延ばしてヤスを挿入し、チューブで引張って針金を引くと、ヤスが四、五十センチは飛んで出る方法で魚が取れるようになったのですが、空腹感は満たされませんでした。

そこで草木の葉と三分の一の飯を搗ついて丸めた「サポ団子」と云うものを作って食べるようになりましたが、排泄物が牛の糞と同じものとなり、まもなく体のために良くないということで「草や木の葉を食べるな」と命令が出ました。

このため、栄養失調はますます進みました。体に水が溜まり、体中がむくみ、腹が大きくなり、杖をついてトボトボと歩いて医務隊に行き、腹から水を取ってもらおうのですが、一週間ほどでまたもとのように戻り、心臓を圧迫して死に至るのです。体がむくむのと、どんどん痩せるのと二つの型がありました。私は痩せる方で助かりました。

動く体力を消耗するから余り動かない方が良く、いや動いた方が良くといえます。しかしどちらにも一理あると思いましたが、私は動いたのです。

海に行つて魚を捕り、夜は一日三枚ぐらいの乾パンを餌えさに鼠を捕りました。鼠も栄養失調で骨と皮ばかりでしたが、初めのころは二〜三匹捕れま

した。皮をむき、膀胱を破らないようにして内臓を取り、焼いて食べると焼き鳥と同じ味がしました。そのころには、フグを食べて死ぬ者や、魚取りの最中に敵の機銃で戦死したり、そして結果的には栄養失調死などで、約五十人の小隊員が二十人以下となったのです。

同年兵や下の兵隊は皆死亡し、兵長の私が一番下の階級になり、食卓番になりました。そして夜は「銀飯を腹いっぱい食べたら死んでも良い」「いやもち米のお粥はうまいで」とか、食う話ばかりが続きました。

その間にも毎日爆撃が続きマキン、タラワ、クエゼリン、サイパン、テナアン、硫黄島ら周囲の各島は相次いで玉砕し、我々のいるウェーキ島は全く孤立してしまいました。

このような状況の中で病院船が来ることが決定しました。千人が帰るそうなので、食料も持参するという情報が伝わり、皆ちよつと元気が出ました。

そして、その人選が始まりました。帰る人は極楽、残る人は地獄で、餓死か玉碎であり、皆帰れる事を祈りました。閻魔大王、これは人選する軍医のことですが、私は軍医より地獄行きを命ぜられました。

昭和二十年七月四日、病院船「高砂丸」が入港、八百七十五人が乗船しました。来島の途中、米軍の臨検を受けて封印されたのか、一俵の米も陸揚げができなかったとのことで、残った千人はガツカリでした。

戦闘糧食は各小隊に分散し保管されました。これを盗んだ人は規律違反で処断すると警告が出ていました。その規律を破って食料を盗んだ軍人、軍属は、手を後ろに縛られて、泣こうがわめこうが食事も与えられず、こうして何人かが死亡しました。食料が無いばかりに全島は生地獄となったのです。

終戦は軍の無電で知ることができ、さらに米機のビラでも知らされました。

敗戦になって問題となった一つに、捕虜のことがありました。米軍捕虜は銃殺されたと、前にお話ししましたが、「捕虜は十八年十月六、七両日の爆撃で、防空壕の中で全員死亡ということにする」と司令から話があったと小隊長は言っていました。そして相談の結果、当小隊は派遣隊のため「知りません」で通そうということで一致したのです。

しかし減食中、陸軍の一兵士が小舟を盗んで逃亡し、死んでいると思ったこの兵隊が、敵潜水艦に助けられ米軍と一緒に上陸して来ました。何を話したかは知りませんが、司令には大きなショックだったと思います。後日、司令は、捕虜銃殺の罪で絞首刑になりました。

昭和二十年九月末、病院船「橘丸」が来て、栄養失調の重症人五百人が乗船しました。残り五百人ほどは、捕虜の件があるから日本には帰国できないという噂が飛びました。敗戦で我々捕虜は羽鳥（ピール島）に集められ、毎日車が迎えにきて

弾丸、弾薬の処理等の作業に引き出されました。

ある日、将校の洗濯に四日行きました。手振りや英単語で大体意味が分かるようになった中で「日本の将校は駄目、米国の兵も駄目だ。米国の将校に日本の兵隊をついたら世界一強い軍隊になる」といったことが今でも忘れられません。

食糧は米国から運ばれてきたもので、皆少しづつ元気になりました。減食時のように食うことの話題もなくなり、郷里の家や家族の心配、伝えられる国内の食糧不足のことなど、望郷に関することが話題に変わりました。

昭和二十年十一月四日、最後の復員船の病院船「氷川丸」が入港しました。大きな船で生還、帰国の喜びは現実のものとなりました。皆一様に明るい顔をして、持物の検査を受けて乗船しました。船上から「さらば！ ウェーキ島よ。戦いと飢えに草むす屍となった戦友よ、安らかに眠れ」と万感胸に迫るものを覚えながら、いつまでも島を見つめ続けました。

船は十三日浦賀に入港、数日後満員の汽車に窓から乗り込んで、二年十カ月ぶりに帰郷しました。

召集解除は昭和二十年十一月十三日、海軍二等兵曹（兵科二補水四三）でした。

ウェーキ島より復員の陸、海軍軍人、軍属、遺族で組織された「大島親交会」は、ウェーキ島に「太平洋の波、永久に静かなれ」の碑を建て、遺骨収集を行い、千鳥ヶ淵墓苑に埋葬しました。

（厚生省発表によると、同島の戦没者数は、三千二百十九柱です）